夕焼け通信1276号　2020.9.21

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２） 22

木幡智恵美

スイカのおっつぁん（2）

長男の免許取得にまつわる話はまだ続く。

浪人プラス留年二年、同い年の仲間より三年遅れの卒業を前に、なかなか就職が決まらない。今度は就職浪人かと心配していたところ、ぎりぎり内々定がとれた。高速道路のメンテナンスをする会社で、内定の最後の条件に自動車免許の取得があった。教習所に行く暇はないから、短期の講習を受けて一発試験を受けると言う。「一発試験はすごく難しいぞ。絶対受からんで」と夫は言うが、もう申し込んだということで、講習に必要なお金を送った。それでも万が一にでも合格できればと祈っていたが、夫の言った通り、何度か受けたものの、卒業までに免許は取れなかった。

「社長にこっぴどく怒られたわ。入ってすぐに免許取れって」と、東京の本社での研修が始まってすぐに、息子が電話をしてきた。何と、会社はそんな息子を受け入れてくれたのだ。

初任地が神戸に決まり、仕事が始まると同時に教習所通い。慣れない土地、慣れない仕事をしながら、仕事を終えると教習所へ通うという生活は、相当に厳しかっただろう。息子なりに社長の恩義に報いるために必死だったようだ。

ここまでが、免許取得に至るまでの話。初めて帰省した時の話はここから始まる。

神戸では、当分の間、自転車通勤をし、運転免許を取得してからは原付を買って通勤していた息子が、中古の車を買ったのは三年目だ。盆休みにその車で帰るというので、気が気ではない。「今から出る」とメールが入ったのはまだ夜が明けやらぬ四時過ぎ。もうすっかり目が覚めてしまい、朝ご飯の支度をしながら息子の帰りを待った。大きなワゴン車が駐車場に入ってきたのは八時過ぎ。「会社の二トン車を運転するのに、よくぶつけるから、大きい車で練習しようと思って」と、にこにこしながら息子は下りてきた。それにしても、着くのが早すぎやしないか。

宮森健次

職員室の風景2

蹴ったり叩いたりは、子どもの日常だが、度が過ぎるとさすがに放っておくわけにもいかない。

一日中小競り合いの絶えないクラスの火元連中をしばらく職員室に通わせた。一日の終わり、下校前にぼくのところにやってくる。

「今日は、パンチもキックもしていません。」

それを聞いて、ぼくは担任がこしらえたカードにシールを貼る。五つシールが並べば職員室に通わなくてよい、という特典がある。褒める励ます、というのが教師の仕事で、その効用は常日頃繰り返し聞かされる。だが、狸親父になっているぼくは、人を叩いたり蹴ったりしなかったぐらいで褒めてもらおうなんて、自分を安売りするんじゃねえ、と思っているので、

「そうか。」

と素っ気ない。それでも、シールが並んでいくのはうれしいらしく、ほとんどの子が最短で職員室通いを終了していった。

「これで終わったからといって、明日からパンチやキックをしていいってことじゃないよ。ずっとやっちゃいけないんだ。」

「はい。」

歯医者通いの最終日みたいなすっきりした笑顔を浮かべて、中にはガッツポーズなどしてみせて、職員室を後にする。

一人、なかなか終わらない男の子がいた。

「今日は、パンチしました。」

「だれに？」

しばらく目を天井に向けて記憶をたどり、ボソッとパンチを浴びせた子どもの名を告げる。ここは、諄諄と暴力の非を説くところだが、そんなことは担任が日々繰り返しているので、狸は言わない。子どもは早く帰りたいのだ。引き留めて説教されたら、それこそ暴力の元、憤怒の種を播くことになる。

「そうか、残念だな。」

それからもシールが二枚並ぶがせいぜいで、パンチやキックが止まらない。それがその子の表現であり、関わりたい気持ちの一つの形なのだが、そのままにしておくわけにもいかない。

「では今日から、パンチやキックをしなかったら、ありがたいおまじないを書く。」

シールに加えて、短冊に筆ペンで論語の一節を書いて渡した。明日もパンチキックをしなかったら続きを書く、と約束した。

続きがほしかったらしい。狸の書く意味の分からぬ漢文をニコニコしながら見つめること五日、その子は無事満願を迎えたのである。

30代フリーター　やあ、ジイさん。新首相の菅義偉は「自助、共助、公助」という言い方で自己責任、競争原理を重視する姿勢を示している。合流新党の立憲民主党の代表になった枝野幸男は「政治家が『自助』と言ってはいけない」（9月10日朝日新聞朝刊）と批判し、与野党の対立軸を「小さな政府」対「大きな政府」に置こうとしているように見える

年金生活者　自民党がそれを受けて立つかどうか。これまで、時に応じて政府を大きくしたり、小さ目にしたりしながら、長期政権を維持してきたのがこの党だ。たとえば「官から民へ」のスローガンで小さめにしたのが小泉政権であり、アベノミクスで再び大きくしたのが第2次安倍政権だ。欧米なら保守とリベラルの2大政党が交代でることを自民党はほとんど単独でやってきた。そんな融通無碍な党を相手に、合流新党は肩すかしを食らう可能性もある。

枝野は「民進党までの綱領は、自己責任や自助を強調する新自由主義的な側面が残っていた。軸足が明確でなかった」（同朝刊）と語り、旧民主党とその後継政党に残っていた「小さな政府」路線を一掃する宣言をした。これに対して、菅政権が「大きな政府」路線を放棄するなら、新しい野党にとっておあつらえ向きの対立軸ができる。

だが、新型コロナで傷んだ経済を立て直すには、財政出動が不可欠であり、アベノミクスで大きくなった政府はさらに大きくなっている。「自助」を第1に置く菅政権でも、いまそれを小さくすることはできない。その点では与野党は一致せざるを得ず、政府の大小は対立点にならない。

30代　野党の主張する消費税の減税は争点になりそうだ。

年金　減税は本来「小さな政府」路線であり、立憲民主党がとろうとしている「大きな政府」路線とは矛盾する。それをどう始末するか。

「大きな政府」路線の中心政策になるのは社会保障だ。これまでその財源にあてられていた消費税を下げるとすれば、そのぶんをほかに求めなければならない。所得税の増税には国民はこぞって反対するだろうし、法人税の増税もこのコロナ禍ではとうてい無理だから、国債の増発に頼るしかない。インフレの危険がない限りそれは可能だし、コロナ禍の今なら「非常時だから」と説明できる。将来の消費税引き上げに言及し、翌日その火消しに回った菅は、この問題が衆院選の争点になりやすい環境をつくったともいえる。

30代　年代別の安倍政権の支持率が最も高かった若い層の声を集めて、政権の7年8カ月を振り返る記事を朝日新聞が掲載していた（9月12日朝刊）。若者たちがたびたび挙げたのが「自己責任論」だといい、「自分でどうにかせねば、と焦る若者たちと、『まず自分で』という菅氏の訴えは響き合うように見える」と指摘している。

年金　今の若者たちの間で自己責任論が目立つのは、それだけ自分で責任を負える範囲が、先行世代の若かったときよりも広がったためと推定される。広がった理由は、経済的な自由の拡張にある。すなわち選択的消費が必需的消費を上回り、選べる職業の幅も広がったことだ。同じことを別の面から言うと、経済的な自由の拡張が自尊心をふくらませ、何かに頼ることを嫌がる傾向を生んだとも言える。

30代　朝日新聞の記事は、新倉貴士という法政大教授（マーケティング）の見方を紹介している。「ネット上のような炎上を実生活でも避けたいのか、学生同士でも発言や振る舞いを気遣っていて『仮面』をかぶっているように見える」。若者たちは他人を批判することを控えているという指摘だ。

年金　人を批判しないのは、自分が批判されないようにするためだ。批判されるのを避けたがるのは、自尊心が損なわれるのを恐れるからだ。その自尊心は経済的な自由の拡張によって獲得された。自由を手にすることは、別の面から見れば権力を手にすることでもある。その権力に見合った処遇への欲求が自尊心を高める。

批判されるのを嫌がる若者たちは、他人が自分以外のだれかを批判されるのも嫌がる。政権を批判する者は「ウザイ」と感じる。

ただし、このことは若者たちがいつも国家権力に従順であることを意味しない。彼らに批判を抑制させているものが自尊心である限り、もし政権が若者たちを見下すようなことがあれば、たちまち彼らの反発を受けるだろう。安倍晋三ほど「かわいく」なく、こわもて風の菅義偉にはそのリスクがある。

30代　同じ朝日新聞の記事は、大学構内で安保法制反対を訴えたら、知らない人たちに勝手に写真や動画を撮られたという大学院生の話も紹介していた。「どこから矢が飛んでくるかわかならい。それが怖いなら、政権を批判しちゃいけないんだ」

年金　この院生はおそらく大学内では少数派だろう。菅義偉はそうした少数者に冷たい官房長官だった。記者会見で政権批判をする東京新聞記者をあざ笑うような応答をしてきたことにもそれがあらわれている。彼は官房長官時代以上に政権批判を許さない姿勢を強めるかもしれない。それがつまずきもとになるかもしれないリスクをはらみながら。

ニュース日記　754

中村　礼治

菅政権と野党と若者